

## 忘れ得ぬ思い出、恩師対面

照井 安彦 (旧9回生)

私は岩中九回生として昭和一四年卒業し、

担任は五十嵐先生で現校舎での第一回の卒業である。ふりかえって見ると早いもので、六

〇年を越える前の事である。

私は自分が歯痛で苦しめられたので、将来は歯科医師になるつもりで岩中に入校した。

もちろんこの外に伯父に歯科医師がいたこと

も影響のあったことでもある。

入学の時は確か一〇〇人ぐらいと思う。そして甲組、乙組の学級編成であったと思う。

この組編成は毎学期毎編成変えがあったと思う。ただこれはどうしてこうなのかは、これ

また六〇年以前のことでは記憶が確かでない。

もし間違っていたらお許し乞う。

思い出として、今七五歳を越えてもなお忘れ得ぬ思い出は、私が二年生の時昭和一〇年、大沢川原の校舎時代、校庭で秩父宮殿下の軍事教練ご視察の際、ご休憩時お茶を奉呈する役を命ぜられたことである。

一ヶ月ぐらい前から身体検査が続けられ、衛生については本当に厳しいものであった。その上毎日、お茶を奉呈するについての宮内庁の女官の方からの指導は今でも忘れられないことである。

当時は貴い方に背を向けることは不敬とされ、ドアの所から何歩前進し、一礼し奉呈、

そしてまた一礼、そのまま進んだ時と同じ歩数を下り、退去するのだが、その時献茶する茶器は昔の大名映画にある様な高台のもので、緊張すればするほど茶器は鳴るので、今にして思えばよく失敗せずに終えたことと思う。当時一四、五歳の少年にとつては一大事であり、大過なく終えて本当によかったと今なお胸の中で去来する。

二年ほど前になるが、東京におられた山中校長先生のお宅へお伺いした際、先生から確かその時のご接待役はお前だったなと申されて再認識したものである。

もう一つは奉安殿を全校で大沢川原より新校舎まで「そり」で引越したことも現在では考えられないことではないだろうか。

お蔭様で歯科医専に進み、昭和一九年秋に繰上げ卒業、研究室に残ったかたわら、東部軍司令部医務室勤務を経て、昭和二〇年三月盛岡へ帰り、駅前で開業し、早々に空襲を受け、そして、現在地に移ったのであった。

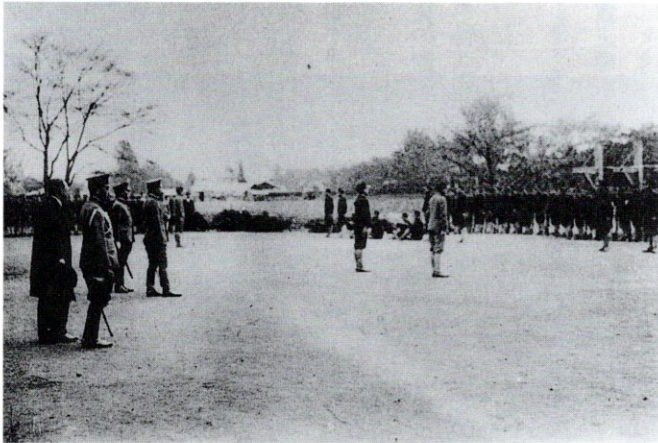
当時は盛岡には歯科医院は一五名で、私は一六番目ということになり、しかも岩中出身では初めての歯科医師でもある。

現在では、岩手医大歯学部があるので、多数になつて歯科医師会の中に岩中会という集まりがあるまでになつていて、優秀な若手の先生方がおり、私としては今昔の思いひとしおである。

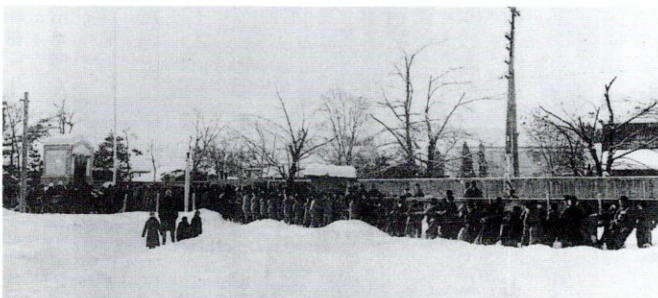
恩師の方々は山中順三先生の外、ほとんど不明であるが、もう一方当時数学を教えておられた吉田勲先生がシベリアから無事帰国されて、東京の所沢に健在とのことを聞いて、上京の折苦勞の末やつとご住居を探し、お会いすることができた。先生は八〇をかなり越しておられ、歩行も少し不自由であった様だが、失礼する時、お見送りをいただき感激した次第だった。二ヶ月後再び上京の折電話をいたしたところ、病に倒れられ、入院したとのことで早速病院にかけつけたが、全く昏睡状態で、主治

医は時間の問題ですとお話しだった。しかし私が先生のお名前をお呼びすると突然目をあけて、はっきりした言葉でよく来てくれたとお話しをされた。私は実はお蔭様で叙勲の栄に浴し、宮中で拝謁の帰りですと話すと、とても喜んで下さった。

これなら大丈夫と主治医も申され、私も頑張つてと申し上げて帰ったが、帰宅後朝早く、逝去のお知らせがあり、びっくりした。なにか先生に最後のお礼に伺つたような気がして忘れ得ぬことの一つである。



秩父宮殿下台臨(昭和12年)



雪中大沢川原から長田町までの奉安殿の移転(昭和12年)